

## 和文英訳および英文パラグラフの「読み」・「書き」による学習者の批判的思考力向上

平 柳 行 雄  
(大阪人間科学大学)

### 1. はじめに

大津(2004)は、母語教育と外国語教育としての英語教育を言語教育として連携させるべきと提案し、言語教育の目的の1つとして次のように指摘している。

言語を使って自己の思考を表現し、同時に、他者の言語表現の意図するところを的確に判断することの大切さを学習者に気づかせる。

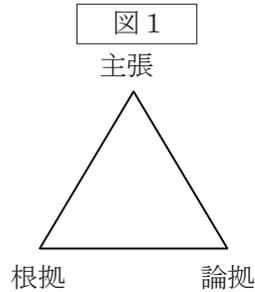
この目的の内容として、(1) 三森の言語技術教育、(2) 福澤の議論の仕方に関する教育、(3) 批判的思考 (critical thinking) の重要性に大津は言及している。

三森(2004)は、言語技術教育を次のように説明している。言語技術とは、英語の”Language Arts”の訳語であり、米国の”Language Arts”は「英語」の授業であり、ドイツでは「ドイツ語」を指す。言語技術の柱は「話すこと」「書くこと」「読むこと」であり、その指導内容は具体的かつ系統的である。言語技術教育の特徴は、「話すこと」に関しては、自分の意見を根拠に基づき発言させディベートに発展する点に、「書くこと」に関しては、論文を書くために必要な技術であり、叙述・説明・分析・論証が個別に指導され、また系統的にも指導される点に、「読むこと」に関しては、テキストを分析して解釈し、批判的に検討する点(これが米国ではクリティカル・リーディングと呼ばれる)にある。橋内(2000)によれば、テキストとは、全体としてまとまりのある一連の言語表現であり、特定のコミュニケーション機能をもつ。

福澤(2006)は、適切性が実証された根拠・論拠・主張・パラグラフ構造理解の重要性に言及し、「議論」を「論証プロセスを経て結論に至る言動」または「主張や結論をなにかの根拠によって裏付けようとする行為」と定義している。三森の言う「根拠に基づく発言・論証の系統的指導・批判的読み」、そして福澤の言う「議論」は批判的思考力に集約されうる。何故なら、楠見(2011)が、批判的思考力の定義として3項目の第1項目で、次のように定義しているからである。それは、「批判的思考力とは、論理的・合理的思考であり、基準に従う思考である。批判的思考のプロセスで適用される構成要素(スキルと知識)は、①情報の明確化(議論の構造の分析、主張・根拠などの明確化、パラグラフ構造、隠れた前提の同定)、②情報の分析(情報源の信頼性、意見と事実の判別、以前におこなった推論による結論)、そして③推論である」と説明している。三森の言う「論証」と福澤・楠見の言う「議論」は同義と考えられる。楠見は、この「議論」を「論証」と言い換えている。したがって、大津の指摘する言語教育の目的の1つとして言及している3つの内容は、情報の明確化と情報の分析と推論という点で、批判的思考に集約できる。本稿では、和文英訳を通じて「議論」と3つの推論を、英文パラグラフの読みとその作成を通じてパラグラフ構造と「議論」を含む情報の明確化を教示し、上記した批判的思考力の向上に資することを論証する。

## 2. 「議論」と3つの推論

福澤によれば、根拠とは、主張と対になって提示される理由をさし、論拠は、主張と根拠を結合させる役目をする暗黙の仮定を言う。これら根拠・論拠・主張という三つの概念は、次の三角ロジックの重要な三つの要素となる。



米盛によれば、推論とは、いくつかの前提（既知のもの）から、それらの前提を根拠に、ある結論（未知のもの）を導きだす、論理的に統制された思考過程のことをいい、それを、演繹・帰納・アブダクションの3つに分類している。ゼックミスタ&ジョンソン (2006) によれば、演繹とは、いくつかの前提をもとに、論理的に妥当な結論を導きだす手続きのことであり、帰納とは、個々の現象から一般的な結論を導きだす手続きのことである。戸田山 (2003) は、アブダクション（仮説推論）とは、「Aということがわかっている。Hという仮定をおけば、何故Aなのかをうまく説明できる。他に、何故AなのかをHと同程度に説明できる仮説はない。従って、たぶんHは正しい」と定義している。演繹・帰納・アブダクションの違いを、米盛 (2009) が使用している規則・事例・結果という用語を用いて説明すると、下記ようになる。なお、福澤の根拠・論拠・主張は、それぞれ米盛の事例・規則・結果に相当する。

演繹：この袋の豆はすべて白い **規則**  
 これらの豆はこの袋の豆である **事例**  
 ゆえに、これらの豆は白い **結果**

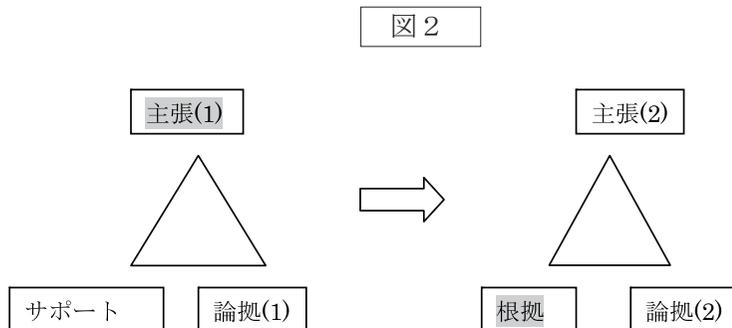
帰納：これらの豆はこの袋の豆である **事例**  
 これらの豆は白い **結果**  
 ゆえに、この袋の豆はすべて白い **規則**

アブダクション：  
 この袋の豆はすべて白い **規則**  
 これらの豆は白い **結果**  
 ゆえに、これらの豆はこの袋の豆である **事例**

前掲された「議論」は、フィッシャーによれば、クリティカル・シンキング（批判的思考）の文脈では、いくつかの主張が、さらなる主張（結論）を受け入れる理由として示される一連の主張である。Lubetsky et. al は、最終的に結論づけたい主張の根拠（“reason”）の裏づけとして“example,” “statistic,” “explanation,” “expert’s opinion”があることを、次のように指摘している。

Once an opinion is given and the reasons for holding that opinion are clearly explained, those reasons need to be supported with evidence. Evidence is the concrete foundation that supports the walls and pillars that hold up the Opinion, the roof of our house. Evidence can be in the form of an Explanation, an Example, Statistic or the Opinion of an Expert in the field.

次に、フィッシャーの「議論」の思考過程を図2で示す。左の三角ロジックの主張の(1)と右の三角ロジックの根拠は同一であることに注意する必要がある(平柳、2010)。



## 2.1 和文英訳を通しての批判的思考力の向上

日本語を英訳する時、それを的確に理解しないと、正しい英文にはならない。日本語を訳す推論過程を明示しながら、和文英訳の模範解答として掲載された英文を批判的に分析する。Example 1-3のうち、Example 1は日本語も英文も間違っていないが、英訳する時に、間違いやすい単語が存在する。Example 2とExample 3は、日本語にも英文にも間違いが存在する。

### Example 1

1. 「昨日、道で**おばさん**にサインを求められた。有名な歌手に間違えたのだろう」

模範解答: "Yesterday I was asked by a woman to give her my autograph on the street. She must have taken me for a famous singer."

「おばさんにサインを求められた」と書かれている**結果**。親族名称(おじいさん・おばあさん・おじさん・おばさん)である「おばさん」にサインを求められることは、一般的には考えられない**規則**なので、この場合の「おばさん」は親族名称ではなく**事例**、他の用法(虚構的用法)であるとなる。鈴木(1981)は、親族名称の虚構的用法を次のように定義している。

話し手が自分自身を原点として、相手がもし親族だったら、自分の何に相当するかを考え、その関係にふさわしい親族名称を対称詞または自称詞に選ぶことである。

なお、鈴木は対称詞と自称詞を次のように定義している。

対称詞は、話し相手に言及することばの総称であり、自称詞とは、話し手が自分自身に言及することばのすべてを総称する概念である。

したがって、この「おばさん」は、"aunt"ではなく"woman"でなければならず、上記の英文は正しい。この推論はアブダクションである。

**Example 2**

「和室の部屋に入る時は、靴をぬぐことになっています」

模範解答： ”You are supposed to take off your shoes when you enter a Japanese room.”

「和室に入る時は靴を脱ぐ」と書かれている（結果）がある。補集合の推意（規則）により、「和室の部屋に入る時は」を「和室以外、即ち洋室に入る時は」と対比されているので、「和室では靴を脱ぎ、洋室では靴を脱がない」という意味と解釈される（事例）。しかしながら、現実的には、このような事例は考えられないので、矛盾していると言える。山本（2002）は、補集合の推意（規則）を、次のように述べている。

集合Sがあるとき、その構成素Cを取り出して話題化したとき、それ以外の構成素群（S - C）が対立項となり、「Cである」と主張することによって、「（S - C）ではない」という推意が派生する。

「Cである＝和室に入る時は靴をぬぐ」と主張することによって、「（S - C）ではない＝和室以外、即ち洋室に入る時は靴を脱がない」という推意が派生する。則ち、和室と洋室から成る日本の家では、「和室は靴を脱ぎ、洋室では靴を脱がない」という非現実的な意味になる。「和室ではなく、日本の家に入る時は靴を脱ぐ」のが現実である。上記の英文の、“a Japanese room” は、“a Japanese house” とすべきである。この推論もアブダクションである。

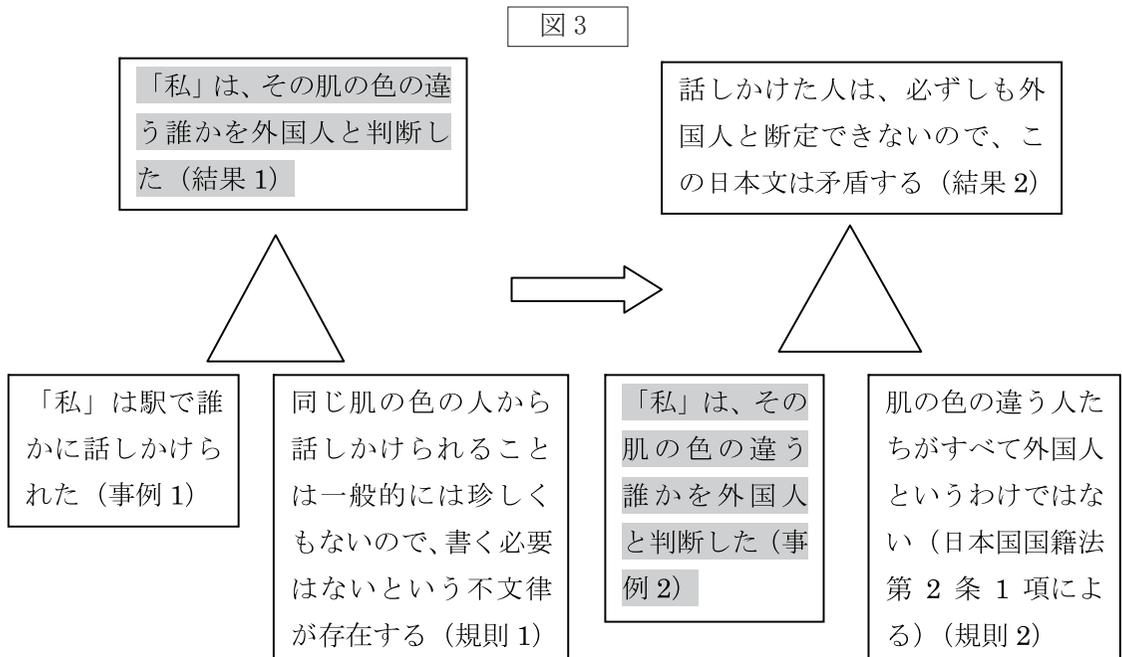
**Example 3**

私は、東京駅で外国人に話しかけられた。

模範解答： I was spoken to by a foreigner at Tokyo Station.

フィッシャーの「議論」を使って、この日本文を分析したい。「私」は、話しかけてきた人を、何故「外国人」と表現したのかという問題である。この文脈で「外国人」は、「日本人とは肌の色の違う人」という意味であろうと「私」は判断した結果1と推測される。何故なら、特別な状況が付帯されていない限り（特別な状況は付帯されていない）、肌の色の同じ人に話しかけられたことは珍しくもなく、「話しかけられた」と書く必要のないことだからである規則1。演繹推論である。

さらに、上記の結果1の「私は、その肌の色の違う誰かを外国人と判断した」を次の事例2とし、「肌の色の違う人はすべて外国人と考えるのは妥当ではない」という規則2とすれば、「話しかけられた人は外国人と必ずしも断定できない」という結果2に導ける。この下線部の規則2の裏付けは、「日本国籍法第2条1項の、片親が日本国籍を所持していれば、子どもは日本国籍を取得できる」である。例えば、黒人と日本人の間に生まれた子どもの肌の色は黒いが日本国籍をもつ。この推論は演繹推論である。上記の英文の“a foreigner” は“someone like a foreigner” とすべきであろう。



この英文を書いた「私」が、「外国人」と判断したのであり、これは事実ではなく意見である。この日本文と英訳された文は、意見を事実すり替えた間違いである。事実と意見を判別しなければならない例である。香西 (2007) は、客観的な陳述のつもりでも、その背後には意識されざる価値判断があると指摘している。

## 2.2 英文パラグラフを「読む」による批判的思考力の向上

福澤 (2006) は、パラグラフを概念としてとらえ、次の項目が必要であると述べている。

- ①ひとつのパラグラフにはひとつの主張しか書いてはいけない。
- ②主張はパラグラフの先頭にトピック・センテンスとして書く必要がある。
- ③トピック・センテンスとして書かれた主張のあとに、根拠をサポーターティングとして書く。
- ④トピック・センテンスと関係すると考えられる根拠のみ書く。

筆者は、複数のパラグラフから成る論証文作成を学生に課すので、次の点を付け加えたい。

「複数のパラグラフから成る論証文における第 1 パラグラフの最後の文は、thesis statement とする」

何故なら、パーキンス (1993) によれば、thesis statement とは、書き手の意見を表明する文であり、この文は小論文のなかで最も重要な一文であり、通常、導入部の最後の文である。次の英文パラグラフは、学生が論証文を書く前の段階で、パラグラフを批判的に読むトレーニングとして使用したものである。Example 4 と Example 5 は、大学生用テキストからの引用であり、そのあとに筆者の分析を記している。Example 4 は *Thoughts into Writing* より、Example 5 は *Debating the Issues* より引用している。

### Example 4

- ① Are Japanese women really equal to Japanese men? ② Many people think that

nowadays Japanese women have the same level of equality as Western women. ③ However, a recent government white paper on equality of the sexes reports that Japan ranks the lowest among the advanced countries. ④ Why is this so? ⑤ First, there are few laws which support women in the workplace. ⑥ Second, Japanese society does not give much support to working women, especially married women. ⑦ At home, women are expected to take care of almost all of the housework and childcare. ----- ⑧ Finally, perhaps the greatest problem is the mind-set of the women themselves. ⑨ Many women are not interested in pursuing careers, and they try to avoid jobs which give them responsibility. ⑩ Such factors as these keep women from reaching their full potential in modern Japan.

- (1) 主張と 3 つの理由(根拠)は、主張+根拠 1 + 根拠 2 + 根拠 3 + 結論という構成で書ける。したがって、5 つのパラグラフから成りたたねばならないので、1 つのパラグラフで終結している点は修正されるべきである。
- (2) 1 つ目の理由は、第 5 文に書かれているが、一文のみから成り立っていて、「主張+その根拠+その根拠のサポート」という構成の「根拠のサポート」が欠落している、
- (3) 第 4 文では、「3 つの理由がある」と明確に述べるべきである。何故なら、この文が thesis statement になるからである。また、これを明瞭に述べなければ、第 5・6・8 文の“First,” “Second,” そして“Finally” が、何に対する「第一に」、「第二に」、そして「最後に」なのかが不明瞭となる。
- (4) 第 2 文では”Japanese women” となっているのに、第 5・6 文では、「職場で働く女性」についてのみ言及されていて、そのあとの文では、そうでない女性には言及されていないので、一貫性に欠けると言わざるを得ない。

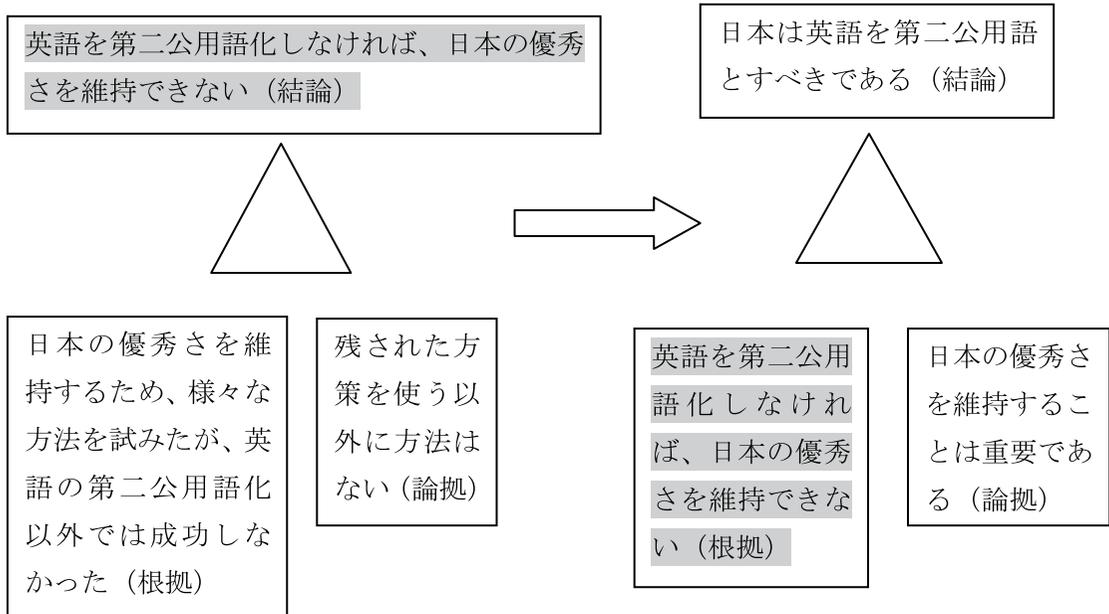
#### Example 5

① Japan should make English its second official language. ② This means all public documents services, including education, should be available in both Japanese and English. ③ Japanese are notoriously poor at English and cannot communicate adequately with foreign English speakers. ④ Unless Japanese become competent in English, we will fall behind other nations in this information age of the Internet, where English is the lingua franca. ⑤ Japan’s information, technology and finance sectors of the economy could even fail to achieve and maintain world-class excellence in the 21st century.

- (1) 「日本は英語を第二公用語として受け入れるべきである」という主張を、第 1 文で thesis statement にしているのはよいが、これについての問題指摘が欠落している。
- (2) 第 4 文の”we”は”Japanese”を受けているので、”they”に修正すべきである。
- (3) 第 2 文で、”official language”の定義をしているのはよいが、第 4 文にでてくる”lingua franca”の定義も必要である。
- (4) 主張の根拠として、「英語を第二公用語にしなければ、21 世紀の日本の優秀さを維持できない」ことをあげている。では、英語を第二公用語にしなければ、何故 21 世紀の優

秀さを維持できないのかというサポートが欠落している。フィッシャーの「議論」を使って説明する。左側の三角ロジックの結果（主張）と右側の三角ロジックの事例（根拠）が同じであることに注意する必要がある。

図4



### 2.3 英文パラグラフを「書く」ことを通しての批判的思考力の向上

アカデミック・ライティングという大学3年次に開講している科目と文献研究演習という大学院生1年次生の科目は、クリティカルに英文を「読み」・「書く」ことを目的に開講している科目である。”Should English be the Second Official Language?”というタイトルの英語論証文を書く課題を与え、何回でもコメント・添削用に提出してよいと指示を出した。1回目と2回目の向上を検証するために、2回提出した学生のみでの作文の一部を掲載する。3名の学生が2回提出した。Aさん・Bさん・C君である。なお、批判的思考力向上を検証する目的のため論証文作成を課しているため、文法上の誤りに関する分析は行っていない。1回目は、上記のExample 4と5を使って、パラグラフ構造を説明・分析したあとで学生が提出したものであり、2回目は、1回目で書いた各自の論証文に対する筆者のコメント・添削を各自が読んでから提出したものである。本稿では、トピック・センテンスと thesis statement とサポートの有無とその妥当性という3項目を判断するので、3名の書いた1回目と2回目の論証文の第1・第2パラグラフの必要な箇所のみを掲載している。この3項目は、情報の明確化（「議論」とパラグラフ構造の知識）を測定できる。なお、このサンプルを量的な分析をせずに、下記の項目において向上したかどうかを確認する。向上しているとなれば、どの項目かも確認する。実験参加者を検証するのは、下記の3項目の批判的思考力のみであるため、この3名に関しての英語運用能力は測定していない。

- 項目 1 : 第 1 パラグラフの最後の文として、thesis statement が書かれているかどうか。その内容が妥当かどうか。
- 項目 2 : 第 2 パラグラフ以下に、トピックセンテンスが各パラグラフの最初に書かれているかどうか、その主張 (thesis statement で述べられている内容) の根拠として妥当かどうか。
- 項目 3 : 各パラグラフに書かれている根拠のサポートが存在し、それが妥当かどうか。

A さん、B さん、C 君の 1 回目の論証文の一部と筆者のコメント、さらにそれに基づいて修正した論証文 (2 回目の論証文) の一部と筆者のコメントを記す。

Sample 1 A さん 1 回目

① There are arguments whether English should be second official language. ② This argument is resulted from the anxiety about the Japanese's poor English communication skill. ③ Japan has already started the English education in elementary schools. ④ This is also related to such a movement. ⑤ However, should English be really Japanese second language? ⑥ I don't agree with it.

⑦ First, English is just one language among many languages such as Russian, Spanish, Germany, French, Korean. ⑧ Especially, Chinese is very important because now the development is very notable. ⑨ Therefore, I think that learning only English is not competitive in global society.

- (1) 第 1 パラグラフに thesis statement に近い表現は書かれているが、"I have two reasons why I don't agree with it." という thesis statement が欠落している。
- (2) 第 2 パラグラフの最初の文 (第 7 文) は、トピックセンテンスになり得ない。第 9 文がトピックセンテンスであり、これをこのパラグラフの最初の文とすべきある。

Sample 2 A さん 2 回目

① There are some arguments whether English should be the second official language in Japan. ② These arguments come from the anxiety about the Japanese ----- ③ Should English be Japanese second official language? ④ I do not agree with it.

⑤ I have two reasons: ⑥ First, only English ability is not enough to win in the global society. ⑦ This argument is come from the anxiety that Japanese may lose in the global economic competition because of poor English ability. ⑧ English is just one language among many languages such as Russian, Spanish, German, French and Korean.

- (1) 第 5 文は、thesis statement で、本来第 1 パラグラフの最後の文になるべきである。
- (2) 第 6 文が第 2 パラグラフのトピックセンテンスである。その根拠である「英語だけが国際社会で生き残るために学ぶ唯一の外国語ではない」のサポートを第 8 文で述べているが、その内容は不十分である。その他に何語がどういう理由で重要なのかを書く必要がある。

## Sample 3 Bさん 1回目

① Japan should make English its second official language.

② Japan is a country with few resources. ③ It's necessary to import resources from overseas for the present rich life. ④ Foreign trade requires the communication using English. ⑤ If English communication can be used positively in Japan, it can play an active part in such scenes farther. ⑥ For example, according to "UNIQLO CO., LTD.", English is official businessized in the company. -----

- (1) 第1パラグラフに thesis statement は書かれているが、問題提起が言及されていない。  
 (2) 第2パラグラフに、トピック・センテンスが欠けている。  
 (3) 第1の根拠として述べられているのは、「日本人の英語力を向上させる必要性」であり、英語力を向上させるには、何故英語を第二公用語にしなければいけないのかというサポートが述べられていない。Example 5の「議論」で説明した同じ内容である。

## Sample 4 Bさん 2回目

① I don't think that Japan should make English its second official language ② An official language means the language with which people can live a civil life. ③ For example, the one used for the civil registration, for the birth certificate, for the official bulletins, for TV and newspaper. ④ There are three reasons.

⑤ The first point is trouble. ⑥ They will not be able to change their language so quickly, because Japanese people have spoken the Japanese language for many centuries.

- (1) 第1パラグラフの問題提起も、thesis statement も良く書けている。  
 (2) 第2パラグラフのトピック・センテンスもそのサポートもよく書けている。

## Sample 5 C君 1回目

① In newspapers and journals have been discussed in English second official language since 2000. ② In beginning, in January 2000, "Japan's 21st century plan" is the final report of proposal. ③ I think English should be Japan's second official language. ④ I have two reasons. ⑤ To understand the global community and to have Japanese culture understand by global community. ⑥ First reason is that Japanese people can develop global literacy. ⑦ They can understand follow global news and deepen understanding about people all over the world. ----

- (1) 第1パラグラフの第5・6文が、thesis statement になっているのはよいし、このパラグラフで、問題提起をしているのもよい。  
 (2) 第2パラグラフで述べている最初の根拠である「"global literacy"を向上させるためには、何故英語を第二公用語にしなければいけない」のかというサポートが欠落している。

## Sample 6 C君 2回目

① In newspaper and journals whether English should be the second official language in Japan have been discussed since 2000. ---- ② English should be the Japan's second

official language. ③ I have two reasons: to understand the global community and to have Japanese culture understood by global community.

④ The first reason is that Japanese people can develop global literacy, an ability to understand global issues and deepen understanding about people all over the world.

⑤ They can understand and follow global news and deepen understanding. -----

(1) サポートの欠落に関しては、2回目も1回目と同じコメントをする必要がある。

(2) 第2パラグラフのトピック・センテンスで、"global literacy" の定義をしているのはよい。

表 1

	A さん 1回目	A さん 2回目	B さん 1回目	B さん 2回目	C 君 1回目	C 君 2回目
Thesis statement (主張) の有無とその書かれている位置とその妥当性 (項目 1)	△	△	○	○	○	○
Topic sentence (根拠) の有無とその書かれている位置とその妥当性 (項目 2)	×	△	△	○	△	○
根拠 (topic sentence) のサポートの有無とその妥当性 (項目 3)	×	△	×	○	×	×

「○は出来ている、×は出来ていない、△は○と×の中間に位置する」という意味である。

上記の表から、3名の学生の論証文で、3項目を検証したが、根拠に対する妥当性のあるサポートを入れることと妥当性のあるトピック・センテンスを第2パラグラフの先頭にいれることがむずかしいことがわかる。さらに、1回目から2回目にかけてAさんとBさんは、上記の2つの項目で、C君は1項目で向上した（網かけ部分が向上した項目である）。実験参加者は少ないことは問題であるが、効果は期待しうる。

### 3. まとめ

英文を書くことを通して、演繹・帰納・アブダクションという3種類の推論と「議論」を、英文パラグラフを「読み」・「書く」ことを通して、トピック・センテンス、thesis statement、根拠のサポートの有無とその妥当性というパラグラフ構造と「議論」を教示ことが可能である。三森の言語技術教育と福澤の「議論」を批判的思考としてまとめた。和文英訳と英文パラグラフの批判的読みを学ばせ、その後で、批判的読みのスキルを英文パラグラフ作成に生かすよう指導した。"Should English be the Second Official Language in Japan?" というタイトルの英文パラグラフを作成させた。学習用のテキストを基に英文パラグラフを批判的思考のスキルと知識を使用しながら分析し、1回目の論証文を書かせ、筆者がその原稿を添削・コメントして返却し、それに基づいて2回目の提出も促

した。2回提出のあった3名の学生に関して、3項目(thesis statement、トピック・センテンス、根拠のサポートの有無とその妥当性)に関して向上が見られたかどうかを検証した。何故なら、この3項目によって、批判的思考力のスキルと知識である情報の明確化を測定できるからである。3名の内2名は2項目で、1名は1項目で向上していることが分析できた。勿論、3名という人数は少なすぎることは今後の課題であるが、和文英訳と英文パラグラフの分析、英文パラグラフの作成によって、批判的思考力の向上が可能でありうることが検証できた。

## 参考文献

- 大井恭子・伊藤文彦(2006)『英語で書くコツ教えます』 桐原書店 東京
- 大津由紀雄(2004)「公立小学校での英語教育－必要性なし、益なし、害あり、よって廃止すべし」『小学校での英語教育は必要か』 慶應義塾大学出版会 東京
- 楠見孝・子安増生・道田泰司編(2011)『批判的思考力を育む』 有斐閣 東京
- 楠見孝編(2010)『思考と言語3』 北大路書房 京都
- 香西秀信(2009)『論より詭弁』 光文社新書 東京
- 鈴木進 パーキンス L.G. (1993)『英文エッセーを書く技術』 アルク 東京
- 鈴木孝夫(1981)『ことばと文化』 岩波書店 東京
- ゼックミスタ E.B. & ジョンソン J.E. (2006)『クリティカルシンキング 実戦編』 宮元博章ら訳 北大路出版 京都
- 智原哲郎ら(2011)『*Grammar Works* 英文構成の定石』 センテージ ラーニング 東京
- 戸田山和久(2003)『論文の教室』 日本放送出版協会 東京
- 橋内 武(2000)『ディスコース』 くろしお出版 東京
- 平柳行雄(2010)『英語教育に求められる仮説形成的指導』 大阪女学院短期大学大学紀要第39号
- フィッシャー・A (2005)『クリティカル・シンキング入門』 岩崎豪人ら訳ナカニシヤ出版 京都
- 福澤一吉(2006)『議論のレッスン』 生活人新書 東京
- 三森ゆりか(2004)「母語での言語技術教育が英語の基礎となる」『小学校での英語教育は必要か』 慶應義塾大学出版会 東京
- 山本英一(1992)『「順序づけ」と「なぞり」の意味論・語用論』 関西大学出版 大阪
- 米盛祐二(2009)『アブダクション』 勁草書房 東京
- Lubetsky, M., LeBeau, C., and Harrington, D. (2000) *Discover Debate* LanguageSolutions Inc.
- Motegi, H., Hesse, S. and Suzuki, D. (2007) *Debating the Issues* MacMillan LanguageHouse 東京
- Reveler N, and Nema, H. (1997) *Freedom, Rights and Responsibility* Kinseido 東京
- Sakamoto, M., Furuya, N., and Hubenthal, C.D. (2002) *Thoughts into Writing* Seibido 東京